かけがえのない山、川、里。生命めぐる、我が美しきふるさと。
映像とエッセイでつづる、人と家と暮らしの物語。

志太平野

二

葉梨川上流　ほたるが舞う里

藤枝市　上大沢

街の時間は速すぎる。この村の時間は、太陽や川の動きに合わせて、ただゆっくり過ぎていく。

編集人／杉村喜美雄（ハイホームス）
撮影／村山正良（M2WORKS）
文／岡本　國治（岡本戦略広告事務所）

人は里山や川とともに暮らしてきました。山が崩れて人々に災いや哀しみをもたらすこともありました。自然のルールを知り、自然と折り合いをつけていく。それが「暮らしていくこと」でした……。

美しく手入れされた茶畑とミカン畑が広がる山の中腹。集落を見下ろす場所に立つと、風の音に混じって、はるか足元の下の方から水の音が聞えてきます。昼下りの時間に聞えてくるのはそれだけ。犬の鳴き声やクルマの走る音も、めったに聞えてこない。上大沢は、葉梨川のもっとも上流にある村。山ふところに、静かに抱かれている山里です。

山の中腹まで届いていた流れの音は、村の二～三百メートル下流にある「大沢峡」の響き。婆々垂（ばんばだる）、瓢箪垂（ひょうたんだる）、雨乞い垂（だる）、据（す）え風呂、薬研垂（やげんだる）。「滝」よりも「垂」の文字が当てられたほど、小さな垂水（たるみ）とその壺が五段。まとまって連なるその姿は、渓流の力強さと造形の美しさを存分に楽しませてくれます。そして何より、ひとつひとつの名の由来を想うとき、この川が人々の生活といかに深く関わり、また人々に愛され親しまれてきたがよくわかります。

新緑や紅葉が美しい「大沢峡」。右は大沢峡を見下ろす道路の崖側に祀られている道祖神。崖崩れのなきよう、安全を願う「不動」の文字が刻まれている。

静まりかえった山あいの里にも、かつては七〇戸ほどの

家がありました。川と、川に迫る山との狭い間に建つ家々。そのほとんどが崖崩れの危険地帯に指定されていることもあり、次第に川下の西方や北方に居を移す人が増えていき、現在残っているのは十二～三戸ほど。生活の音が馨かなくなった家が、あちらにもこちらにも点在するようになってしまいました。

村を離れていく人も、村を嫌いになったわけではありません。何事にも丹誠を込めて、一途に生きてきた。そんな日々の繰り返しを長く重ねてきた場所には、暮らしの営みが種火のように残っている。ふる里はかけがえのないもの。だからこそ、自然と人と生き物が育んできた関わりの糸を、カンタンに途切らせてはいけないのだと思います。

自分たちでは自慢できることと気づかなくても、外の人から見るとスゴイこと。上大沢村の人々にとって、「ほたる」がこのケースでした。

六月はじめ。川の流れに沿って、水面から金色の光が湧き出てくるように舞うほたる。そうしていちど高く舞い上がった光は、圧倒的な数で谷間の空を覆い、点滅のショーが続きます。家々の明かりは落とされ、辻々の行灯（あんどん）の灯りだけが揺らめき、光の舞いはいよいよ幻

上大沢村のほたるは、70～80メートルの高さまで舞い昇る。
この沢の気温や湿度が関係しているのでしょうか。

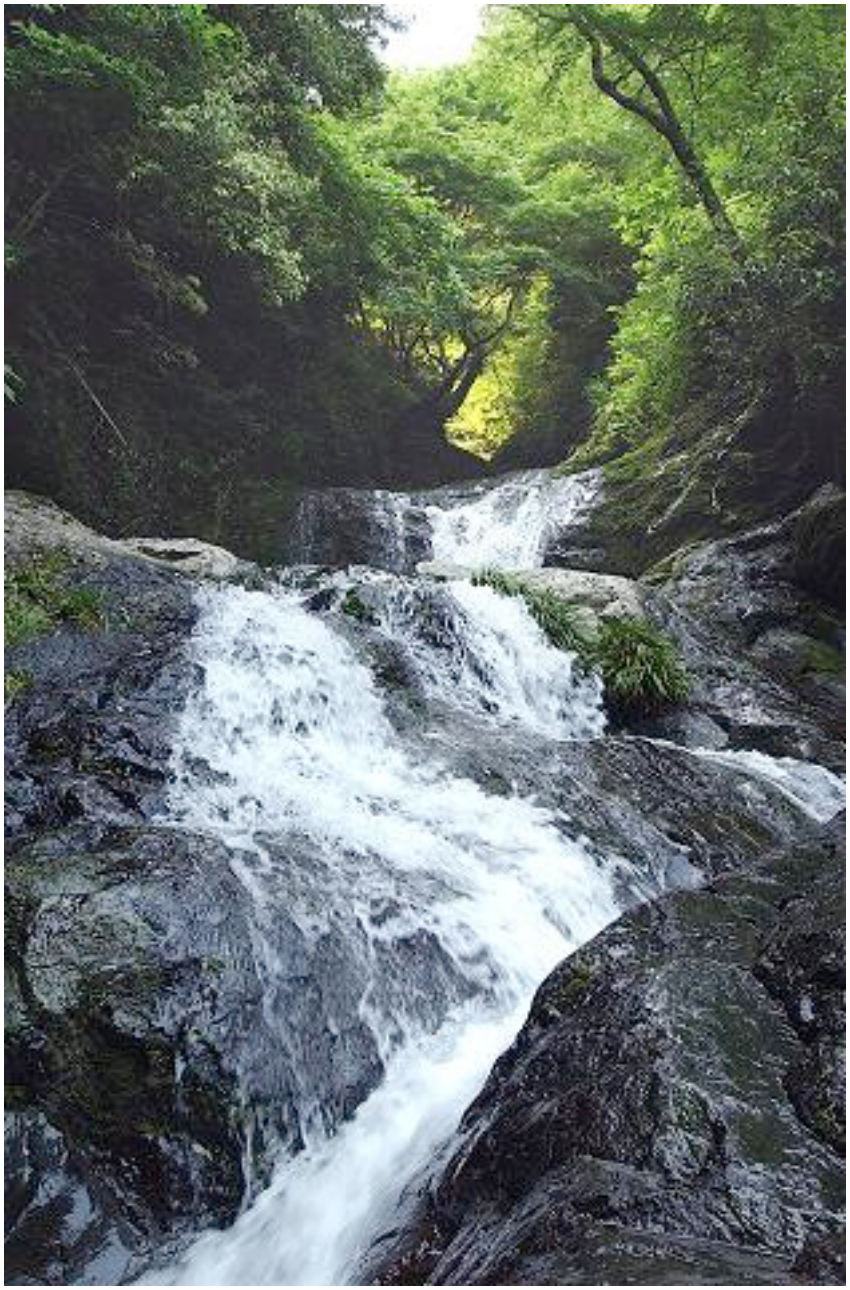
想的に、神々しさをたたえてきます。

けれど、ほたるが飛び交う数日間のクライマックスだけが、すべてではありません。ほたるが舞うには、卵、幼虫、サナギ、成虫と、水中から大気中に棲むすべての過程で、生きていける環境が整っていなければなりません。幼虫時代はカワニナを食べます。カワニナは水草や藻がなければ生きられず、水草や藻はきれいな水と豊富なミネラルを必要とします。生命の関わりの連鎖をつなぐこの環境こそ、ここに住む人々が自慢と誇りにできるものです。

バスの終着地である上大沢村の入口から、ビク石ハイキングコースは、河鹿蛙の棲む川沿いに始まります。歩き始めて七～八分、道が中堅者と初心者用に分かれるあたりに、村の人々の手により、ほたるの池がつくられ、初夏の夜空に舞う日に向けて、大切に守り育てられています。

自然と人と生き物のバランスが崩れたとき、ほたるは人々の生活の近くで棲めなくなったのではないでしょうか。自然と人が共存できていた頃の姿を、残していくのもまた人の役目。この村からほたるが消えることがないよう、そして、上大沢村のような村が残っているありがたさを、私たちは大事に思っていかなければと思います。

ほたるの池には、幼虫のエサとなるカワニナも豊富。
今では、カワニナの棲む場所も限られています。



ホタル募金
毎年多くのホタルを
発生させるために
ホタル育成募金に
協力をお願いします
大只地区では
ホタル育成に
努力しています
ほたる
の里